大本山永平寺

大燈籠ながし

暑い日が続きますが、毎年八月のお盆が過ぎると幾分暑さが和らいでまいります。

この時期、毎年恒例となる「大燈籠ながし」が行われます。今年で二十七回目を迎え、九頭竜川の河川公園を会場に、日中からコンサートやバザーなど様々な催しがあり、永平寺町にとどまらず福井県内外から多くの人が集まります。

そして、日が沈み辺りが暗くなるころ、永平寺より役寮・修行僧約一二〇名が特設のステージに上がり、一万基程の灯籠が供えられた祭壇の前で大施食（だいせじき）法要を営みます。

法要が終わり荘厳な雰囲気に包まれる中、導師を勤めた永平寺監院（かんにん）が、主催者と共に九頭竜川の岸辺より火の灯された燈籠を静かに流します。これは、ご縁ある様々な生きとし生けるものに感謝の気持ちを表すのです。

続いて一般参列者が一斉に燈籠を流し始めますが、ふと川辺を見ると、いつの間にか無数の燈籠が帯状に蛇行しながら流れる様が目に映り、その幻想的な光景に人々は魅了されます。

最後は満点の夜空に打ち上げられる花火で締めくくられ、その打ち出しを合図に修行僧は永平寺へと戻るのです。

修行僧にとって大きな思い出の一つとなる大燈籠ながしです。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

峨山道巡行（輪島市職員先達）

永平寺七十八世 宮崎禅師 建立の石碑

峨山道を歩く

總持寺では七月がお盆の月にて、旧盆にあたる八月は多くの修行僧が師寮寺（師匠のお寺）補佐で他出（帰省）します。このため、さすがの本山も人が少なくなり、もの寂しくなります。

特に今春上山の修行僧にとっては初めての他出となり、たくましく成長した姿をご本師やご寺族、お檀家の方々にみていただく良い機会でもあります。

旧盆が終わり、それぞれの地方から修行僧が戻ってくると、總持寺は再び活気に溢れます。

毎年八月下旬には「祖蹟巡拝」が行われ、ご開山瑩山さまや二祖峨山さまゆかりの地を訪ねます。特に今年は峨山さまの大遠忌にちなんで「峨山道」を歩きます。はるか昔に峨山さまが永光寺と總持寺の住職を兼務されている時、五十数キロ離れている両寺を健脚で往復された故事を慕っての報恩行です。

修行僧にとっては、じかに峨山さまの歩かれた山道を自分自身で歩くことによって峨山さまを身近に感じ、その教えが脈々と自分たちに相承されていることを実感するのです。

これは修行僧たちが峨山さまの「大いなる足音」に耳を澄まし、また自分自身の大いなる足音を響かせることになるのです。

大本山總持寺／045-581-6021

曹洞俳壇

選・村松五灰子

爪切ってあげやふ春の影二つ

京都府　村井　澄子

評　明治から昭和にかけて活躍した竹久夢二が描く大正浪漫の嫋やかな女性を連想させる。春宵の二人の影。想像はいよいよ膨らむ。

船戻る糶は一っ気に初鰹

千葉県　鈴木　英子

評　初夏、一番にあがった鰹が「初鰹」とされている。漁船が戻った。市場の空気は一挙に初鰹の活気の糶となった。

◆七十路は遊びざかりよ桃の花　神奈川県　大竹のり子

◆山吹の咲き隠沼をかがやかす　岩手県　鈴木　道昭

◆水満ちて蛙の国となりにけり　千葉県　甲斐　勇

◆新茶のむ母百才のひとり言　埼玉県　中島　新一

◆休日は権兵衛となり種を蒔く　東京都　伊奈　三郎

◆二人づつ二人づつ来る橋涼み　秋田県　小田嶌恭葉

◆父の日や父の愛した都電乗る　東京都　野村　信廣

◆代を掻く棚田一段づつ下りて　山口県　御江やよひ

◆老うまいと心に決めて更衣　静岡県　村松　保子

◆香煙の低く乱れて梅雨けはい　千葉県　池田　國雄

＊選者吟

蜩や山気に方位見失ふ

五灰子

＊作句小見

写生は、心にかかった対象を徹底に凝視すること。そうしてあくびが出る程見る。すると最初には見えなかったものが見えてくる。それが発見に。自然（広い意味の）と自分の感動や思いを重ねて一句が出来上がります。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

紅白の花水木咲く公園の隅に積まれる除染の土嚢（どのう）

福島県　大槻　弘

評　原発事故後三年が経過しても除染は進まない。季節は推移し美しく花が彩るが、その片隅に積まれた土嚢が現実の過酷さを突きつける。人々に元の暮らしはいつ戻るのだろうか。

受胎せぬ乳牛（うし）を市場に積む朝は別れに牛も涙浮かべたり

岩手県　池田　眸

評　人は命をいただいて生きていることを改めて思う。受胎せぬ乳牛は牛乳が採れないから飼育する価値がなく食肉になってしまう。飼い主のやりきれなさが見た涙だろう。「積む」という物としての扱いにも心が痛むがこれも現実なのだ。

◆ふじ咲けば吉野秀雄の歌うかぶ訪（と）いしことなき大和飛火野

三重県　小阪　晋

◆どの顔も下がり眉にて頼りなし世界の首脳困惑の態

東京都　野村　信廣

◆考妣（こうひ）の汗の染み込む畑に居て今年も植えむ茄子と胡瓜を

新潟県　星野　三興

◆ひと跨（また）ぎすれば越せるも春なれば心はずみて細流に沿ふ

三重県　野呂　と志

◆親から子曾孫に継がれておひな様今日初節句の祝い尊し

愛知県　深谷ハネ子

◆鍼治療受けつつ医師の口ずさむ西行の歌一つを学ぶ

秋田県　佐藤　和子

◆朝掘りの筍として珍重す瑞みづとして産毛光るを

東京都　長谷川　瞳

◆一人降り一人も乗らぬ里の駅青田の闇にほたるとびかふ

秋田県　小田嶌恭葉

◆ひと握りの塩水にアサリ砂を吐くわれは短歌（うた）詠み哀しみを吐く

山口県　横川美代子

◆戦争で父爆死して赤子われその後の年月夢にすら見ず

愛知県　村瀬摩佐子

＊選者詠

右足をやや前に出すお姿と瑣末（さまつ）な知識得るもうれしく

ちづ

＊作歌小見

新緑の奈良を訪ね某寺の観音さまにお参りしました。万葉集の歌碑や句碑との出会いもありました。花は散った後でしたが初夏の木もれ日が爽やかな一日でした。日常から少し離れた小さな旅は作歌の刺激になるようです。